

マックス・シェーラーと典型論

五十嵐 靖彦

マックス・シェーラーは、「典型と指導者」と題する草稿⁽¹⁾を残している。十分整理されているとは言えない上に、補遺を含めても百ページに満たない小論である。かれの予定では、もっと大部の著作の一部となるはずのものであった。そのことについてかれは、書名までも挙げて再三言及している。⁽²⁾「愛の秩序」、「羞恥と羞恥心」、「自由」論などと同様に、ここでもわれわれは、当該テーマに関してかれ自身が抱懐していた思想の全体を直接与えられることなく、諸断片を通じてそれを推しはかるという間接的關係に立たされるのである。とは言うものの、かれのこのような有言不実行を、空手形の乱発として俄かに謗るということもまた公平さを欠くことであろう。というのも、第一次大戦前後の激動期にあつて、かれがヨーロッパの運命を案じ、その精神的文化的再建をめざして誠心誠意努力を傾けたことは、まぎれもない事実だからである。情緒主義的価値人格主義というかれの原理的立場に立つての、多くの時局的著作がそのことを示している。溢れるばかりの情熱と豊かな着想の迸りが、現存在の制約に先行し、具体化が追いつかないといった事態がしばしば起っているのである。

それにしても、「典型と指導者」に関する構想は、かれの中ではほぼ十年間にわたって温められ、書き継がれていたテーマであった。⁽³⁾主著の『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』に直続し、かつ、それを補完する重要な諸問題を含んでいると、かれ自身が承知していたからにちがいない。事実そこには、なるほど予定していたテーマのすべ

てが取り扱われているとは言えないものの、かれが本来いかなる倫理学の構築をめざしていたかを、主著を一步進め、鮮明にうかがわせるものがみてとれるのである。

本稿でわれわれは、主として、かれの右のような背景をもつ「典型」論を資料としつつ、また、同時期に属するいくつかの論稿も合わせ参照しながら、シェーラー倫理学の特徴的側面を明らかにすることにした。手順として「典型と指導者」の思想内容をわれわれなりに連関的に把握する部分と、それに対して提起されうる諸問題を取り扱う部分とに大別し、順次論ずることにした。

一

「典型と指導者」に関する論文でシェーラーは、理想的な価値人格像としての諸々の典型が、われわれの道德的生活において果たす独特の意義と役割とを、類似の概念たる指導者との概念的区別を明確にすることによって、浮き彫りにしようとするのである。ここには、われわれのみるところ、三点にわたる主張が包含されている。まず、指導者と典型とは似て非なるものである、ということ。次には、典型は一つではなく、諸々の価値領域に應じて多数考えられるということ。そして最後に、われわれの価値生活の導きの星となるものは、抽象的な理念や規範ではなく、諸価値が人格と結合して具体化している模範的な人物像である、ということである。以上の三つの主張は、結局は、「愛する存在 *ens amans*」としての人間、というかれの根本思想に根拠づけられ、かつまた、それに帰一している。それ故、人間の有徳化、道德的価値の実現過程というテーマ圏に即してのこの根本思想の特殊化、これがこの論文の趣旨である。それでは、順次その主張をみていくことにしよう。

シェーラーは、指導者と典型のちがいとして以下の諸点を挙げている。⁽⁴⁾①指導者は、自分が指導者であることを自

認し、かつ意欲している。従つて、指導者と被指導者との関係は、双互的な意識的關係である。これに對して、典型と追隨者との間には、このような意識關係はない。②指導者と被指導者との間には、常に、時間・空間的な現在の關係が成り立っているのに對し、追隨者は典型を觀念的に導きとする。兩者の關係は、非現実的・非歴史的存在である。それ故、單に歴史上の人物のみならず、伝説や文学作品上の人物も典型となりうるのである。③ある人物が指導者であるということは、没価値的に單に社會學的に語られるにすぎない。かれが實際に善導していると、誤導しているとを問はず、ともかく多數者を統率し、指導している限り、指導者なのである。これに對し、典型は追隨者にとつて常に、愛され、尊敬され、進んで従わせるすぐれて価値にあふれた人物である。

そして最後に、シェーラーは、指導者性と典型性とは同一人において兼備されるための限定的な條件にふれた後に、指導者と典型との關係について一般的に成り立つこととして次のように語っている。「指導者の陶冶、指導者の選択にとつても、さらには、とりわけ指導性の質そのものにとつて、因果的に規定的であり、ないしは、本質的に共同規定的であるものは、影響力のある典型である。このことは、われわれの意志作用がわれわれの評価作用によつて——結局は、われわれが愛し、憎むものによつて、われわれの価値先取と後置の構造によつて、規定されるのであり、その逆ではないという命題と同様確かである」⁽⁵⁾。即ち、④典型が指導者を決定する、というのが兩者の規定關係なのである。ここには、上述の、「愛する存在」という人間觀の一端がよく現われている。シェーラーにとつて、自発的な愛作用こそが人格の最深・最奥の規定力である。これが諸々の価値の優劣感や価値感得そのものを決定づけている。さらには、これらの価値意識に促がされ、知的領域が開示される。その意味で、認識は愛の從變数である。⁽⁶⁾ 知的レヴェルのみではない。意欲の發動と意図形成、従つて、選択の如何を左右するのも、この人格中核たる愛作用なのである。シェーラーにとつて、「人間は、思惟する存在もしくは意欲する存在である以前に愛する存在である」⁽⁷⁾という情緒主

義の人間把握は揺るぎない中心思想であったのである。これは単に個人の精神生活にとってのみ妥当するのではない。社会集団の結合紐帯となるのも、また、歴史の推進力となるのもかような愛憎のあり方、即ち、評価様式の優先規則であるとされるのである。かれは、一方で、この思想を原理的にたえず深めていくと共に、他方ではそれをたずさえ、歴史的社會の政治・経済・文化・教育・道徳などの諸領域の問題状況に臨んだのである。それは多くの批判的提言となつて現われている。さし当つてそれらについては問わない。そうしたシェーラーであつてみれば、指導者の選択と在り様は、われわれにとって先づ的に与えられている価値理念の具体的人格類型たる典型像の影響下で決定される、とみるのは至極当然のことであろう。それならば、典型にはどんな類型が考えられるであろうか。第二の主張点に移ろう。

典型の類型モデルについては、基本的考え方がすでに名著『倫理学』で予示されている。

典型とは、「人格統一の統一形式のうちにある一つの構造化された価値態 Wertverhalt」である。⁽⁸⁾即ち、道徳的に善なる価値人格の模範的類型である。そして「普遍的倫理学が規定しうるのは、純粋な価値人格類型のうち、普遍的な類型のみ」⁽⁹⁾であつて、特定の個人や歴史的社會にとっての典型ではない。それらは、普遍的モデルの枠内にあるものの、別途具体的事實に即して指摘されねばならないのである。しかば普遍妥当な純粋な価値人格類型は、いかにしたら把握されるであらうか。それらは、「最高価値としての価値人格の、以前に獲得された理念を、価値の諸状態の序列と結合することによつて生ずる」⁽¹⁰⁾のである。ここに価値序列と対応して、1、快適価値―享受の技巧家、2、有用価値―文明の指導者、3、生命価値―英雄、4、精神価値―天才、5、聖価値―聖者、という五つの典型モデルが得られることになる。価値序列観が初めて提出された箇所では、有用価値は必ずしもこのように位置づけられてはいないが、⁽¹¹⁾ともあれ、アプリアナ五つの価値段階に應じて、アプリアナ五つの典型モデルがあるとされ

ているのである。

「典型と指導者」では、これを享けて次のように述べられる。「アリストテレスがすでに、快適なもの、有用なもの、美しいもの、として規定した根本価値を、私は以下のような五つの根本様態に還元した。それらは、快適もしくは奢侈価値の価値領域、有用価値もしくは文明価値の価値領域、高貴なものもしくは生命価値の価値領域、精神的諸価値（真の認識、美、義）もしくは文化価値の価値領域、聖なるものもしくは宗教的根価値の価値領域、である。⁽¹³⁾」そして、「まさに、これらの根本価値に、生の技巧家、文明の指導的精神、英雄、天才、聖者という五つのいわゆる典型モデルが対応する。⁽¹⁴⁾」一部に表現のちがいがみられるもの（これによって価値様態の高低による五つの序列に対応して五つの典型が普遍的に成り立つとされていることが明らかである。この際、典型一般に通じて言えることとしてシェーラーが力説するのは、典型は、歴史の実例から共通の目印を抽出されて構成された経験的概念ではない、ということである。「むしろ、われわれは、これらの典型モデルを手引きとして、歴史上の偉大な人間を理解するのである。⁽¹⁵⁾」従って、偉大とされる具体的な人物について、その典型性を測定してみると、「純粹にして完全な典型は事実としては存在しない」し、かつまた、種々の典型としての質の混合もみられることにもなるのである。典型とは、それ故、それに基づいて特定人物をその具体例に擬しつつ、それに学び、もってわれわれの道徳的生活を豊かにし、向上を図ろうとする人格理念的な導きの星なのである。

シェーラーは、以下において五つの典型の意義と役割を具体例を示しつつ論述している。われわれは、その内容を最少限確認しておくことにしたい。

1、聖者 聖者は、その志向性において常に根源的に、神的なものに直結している存在であり、神への愛がその全存在を貫徹している。かれは、全愛者としての神と愛を共にすること最も大なる者である。他者は、かれに追隨

し、かれの愛の方向を呼吸することによって、否応なくかれのように生きようと回心する。聖者への信仰は聖者の時間的秩序に属する作品や事蹟、諸行為などから由来しない。むしろそれらは問題とならない。まさにかれの人格の存在自体、存在のカリスマ的質そのもの、それと不可分になっている徳に由来する。それ故、追隨者の中には、時代・社会・民族・素質・環境などの偶然的相違を越えて、聖者が永遠に現在している。あの聖者は、この状況ではこう語り、こうふるまうにちがいない、という形で創造的な模範の源泉として生きつづける。その影響力は、精神的な愛共同体が存在する限り涸渇することがない。このような聖者として、シェーラーは、イエスやアッシジのフランチェスコなど多くを想定している。もとより、典型性の深淺による多様な分節化がなされているが。

2、天才 シェーラーは、カントやショーペンハウエルの議論を手懸りとしつつ、自らの天才論を展開している。天才とは濫用を慎むべき概念であって、美・真・義という精神的価値の理念に結びつく、芸術家、哲学者にして賢者、立法者にして裁判官に限るべし、とするのがシェーラーの見解である。かれら天才はいかなる人物であろうか。かれらは燃えるような世界への愛を抱き、自らの独自の世界をもち、それを個性的な作品に実体化する。かれらは既成の規範や規則から自由である。作品は天才の個性的・独創的な世界像そのものを示している。世界はこれによってわれわれにとって拡張される。人々は、作品にふれることによって自らに開示されていなかった新たな価値世界に驚嘆し、覚醒する。天才の影響力は、その世界関与性によって、文字通り世界市民的であるが、しかしだからといって聖者のそのように永遠的ではない。なぜなら、作品という客体的・限定的な媒体を紹介しているからである。なるほど文化財に含まれる文化価値は政治や産業上の歴史の変遷からは超然としているが、物質一般に刻印されているということそのものからくる有限的時間性を免れがたいのである。歴史上の天才

として、シェーラーは、モーツァルト、ソクラテス、ソロンなど多数挙げている。

3、英雄 英雄以下の三類型は、身体秩序に属している。英雄は、生命的な諸価値への愛によって規定されている。かれらが模範であるのは、その愛のしからしむるところ、強靱な意志力と実行力に基づいて事實的なわれわれの生活圏を「大胆」かつ「勇氣」をもって変革するところにある。この変革の事蹟は、こそがかれら英雄の影響力の源泉である。政治家、將軍、開拓者など種々の種別にさらに分類されるが、かれらは一様に冒險的な生命活動領域の拡張事業の故に讃えられる。といつても、その名譽は、民族的・國民的範圍に限られている。シーザー、ビスマルク、ナポレオンなどがシェーラーの考えている國家的英雄である。

4、文明の指導者 この類型は、研究者、技術者、經濟的事業家からなる。かれらは、人類や人間社会への愛に満たされ、その諸行為や作業によって人類社会の進歩に寄与する。研究者の新発見、發明的技術者の新發明、企業家の製品開發は、有用価値を顯現する。しかし新手の改良案が登場した時点で、その意義は色褪せたものになる。はかない。それ故、かれらは人格としての自己価値を有しているとはいいがたく、前三者に比し、はるかに狭く局限された影響力しか及ぼさない。

5、生の技巧家 快適価値の享受が主觀的な芸術にまで高められているのがこの類型である。その故、享受の芸術家とも言われうる。その道の通と言われうる人は、快適さへの繊細な感受性をもち、食欲に享受を追い求める。かれらと文明の指導者との關係は、批評家と芸術家との關係と類比的である。批評家の炯眼な批評が作家の意欲を鼓舞することが多いように、通人の時として気まぐれの食味感が料理人を一喜一憂させる。それ故、批評家の鑑賞力、享受者の感受性は、創作家・事業家にとって目標となりうる。といつても、その自存性から言えば、前者は後者に依存していることは確かである。シェーラーは、他の箇所⁽¹⁶⁾で有用価値を快適価値に従屬せしめた

が、ここではそれを逆転しているのである。なお、かれは、4と5については、かなり雑然たる書き方をしている上に、具体的人物も指摘していない。この両者の位置づけが、なお流動的であったことをうかがわせている。

以上によって、各典型の凡その特徴が明らかになった。繰返しになるが、これはあくまで普遍的モデルであり、民族により個人によって典型像は、その中でさまざまな変位する。かつまた、二つ以上の典型性を兼備した場合もある。それはともかくとして、シェーラーが諸々の価値領域にわたって実に多彩な典型を考えていたことが明らかである。われわれは、それぞれ自己にふさわしい典型をもち、それへの敬愛を通じて、いつでも価値実現の心の準備ができている状態へと心情を変化させねばならない。典型はそういう形でわれわれの徳性を喚起・函養する有力な源泉である。

ところで、その際、典型がわれわれの道德生活の向上にとって有益な役割を果たすことを承認するとして、その役割は手段的・補助的なものにすぎないのか、それとも根源的なものなのか、という問題が起る。言い換えれば次のような問題である。われわれは、自ら価値意識をもっているのであるから、仮に典型を欠いていたとしてもそれなりに有徳たりうるのではないか、それならば、典型は、あるにこしたことはない補助的手段といった程度の意義をもっていると言えるのではないか、といった立場の可否である。これに対しシェーラーの第三の主張は、否と答えている。

われわれは、たとえばモーツアルトの音楽のすばらしさ、エジソンの発明品の便利さ、名料理人の手になる美味なる料理、に大いに驚き、かつその恩恵に浴する。それらの人物の周辺に諸価値がつきまとっているのを直観する。このとき、われわれは予め定立している自らの価値理念に照らして、かような人物をその理想的な実現者の実例として承認するのであろうか。それとも、かかる人物に魅了されていることによって、その人格にまわりついている諸価

値に眼ざめるのであろうか。人間は理念で動くのか、それとも人格への愛によって動かされるのか、と言いかえてもよい。この問いに対するシェーラーの答えは、後者に傾いている。「愛する存在」という人間観とは、つまりはそういう見方なわけである。かれは、カントの理念主導型の倫理学を疑義あり、とした。抽象的な道徳的法則は、人間を徳化しない、規範や理念によってではなく「人間は人間によって自ら向上する」とかれは考えるのである。物心つく以前に幼児にとって両親が、また、教育される知識内容に先立って、学童にとって教師が典型となることをかれは指摘する。それ故、「われわれが人格として憎む教師は、知的領域の全体に対する嫌悪の念を起こさせる」のである。⁽¹⁷⁾

われわれは、まずもって愛によって動く存在である。愛の及ぶ対象は種々ありうるが、「諸人格に、すなわち人格的な存在形式をもつ何かにかかわるということが、愛の作用の本質に属している」。⁽¹⁸⁾ しかも、人格への愛は、単に当の人格のもつあれこれの偶有態に向かつて注がれるものではない。道徳的に価値高い愛とは、その人格の特性、活動、才能、徳性、行為、言葉などの故の愛ではなく、それらすべてを中枢において統一づけ、その発現諸形態たらしめている、この個体的人格それ自体へと向かう愛なのである。⁽²⁰⁾ このとき、この愛される他人格は愛する人格にとって、いよいよ価値高い存在へと高められる。これが、他の価値意識にはみられない、すぐれて発見的、創造的な愛の働きである。そうであれば、典型への希求作用は、われわれに原初的に備わっていることになるであろう。典型を意識的に選び、まつりあげるのではない。典型形成は、認識作用や意志・努力作用、選択や優劣感によって行われるのではなく、「論理以前の意識、選択圏を把促する以前の意識」⁽²¹⁾ によって行われるのである。まず典型への愛があって、諸々の価値意識が触発・感化され、然る後に、それに影響される形で何を為すべきかの手懸りを得るのである。従って「典型は、われわれの可能的な意欲と行為の作用空間 Spielraum を規定している。われわれは典型を愛することによって、自己の存在自身のうちにあって、典型と類似のものになる」⁽²²⁾ とも語られる。このことからまた、道徳教育的

には、典型を早期にもてばもつ程、人間の発達にとって効果的であると言えるであらう。なぜなら、そうした価値典型が、その後の可能な経験の範囲を選択的に決定するからである。

以上のようなものであるならば、われわれは自らの確固たる価値意識に基づいて随意的に典型を選ぶのではなく、われわれの価値意識そのものが深部においてすでに典型によって規定されているとシェーラーが考えていることは明らかであらう。

すでにみた五つの典型モデルは、すべて以上のような観点、即ち、理念の洞察に先立って人格への愛があり、非対象的な人格への愛は対象的な事物への愛にまさる、とする思想の下に配列されたものである。価値序列を決めるものは、愛の秩序である。典型の序列もまた、愛のあり方によって決せられる。天才以下の四類型は、非人格的な対象への愛の模範的な所有者である。天才は世界への熱情的な愛をもち、その作品がわれわれの愛の対象となる。英雄は、生活圏の拡張への度はずれの強い関心をもち、それに基づき事蹟を残す。その名声は末長く記憶される。文明家や事業家の才覚、努力、工夫、勤勉などは、われわれのよき手本になる。享受の技巧家は種々の快楽がありうることをわれわれに教え、センスを洗練させてくれる。これらに對し、聖者⁽²³⁾にあっては、愛の最高の、本来的あり方が顕現している。かれらは神的人格への愛によって、その全存在を貫徹している。あれこれの語り、ふるまい、徳行などは、かれらにあっては、その人格と切り離して問題とはなしえない。これらは、手足のようにかれの愛によって奉仕させられている。われわれは、聖者を通してはじめて、神性が現存することを知るのである。

シェーラーは、同時期の、神の現存在証明を扱った論文⁽²³⁾において、目的論的証明、宇宙論的証明、存在論的証明、道德的証明(要請論)のいずれをも退け、愛を共にすることを通しての秘義的な實在証明を提出している。われわれは聖者の人格を愛し、かれへの信仰を抱くことによって、しかも聖者の直観方向・愛方向を共に遂行することによって

はじめて、神の实在性を定立しうる、とされている。さらに、このとき、自らがこのように愛し、考え、意欲することのすべては、実は神のうちですでに愛され、考えられ、意欲されていたことの共同遂行 *Mitvollzug* にほかならないことに気づく、とも言われている。そのような意味で、神は、全愛者 *Alliebender* であり、全天才 *Allgenies* であり、全英雄 *Allhelder* であり、一切なのである。ここには、スピノザ的雰囲気横溢している。「絶対領域」に関するこの論文が、神と聖者との関係を扱う宗教論だとすれば、「典型」論は、道徳論である。とは言え、シェーラーの場合、道徳論は宗教論と別個のものではない。というのは、かれは、神と聖者との関係と、典型（聖者）と追隨者との関係を類比的に考えるからである。この三者の間には、全愛者（無限人格たる神）——有限的全愛者（聖人）——部分的に愛する人（追隨者）という三極からなる人格的愛のピラミッドが成立している。「人間が、それにおいて、徐々にかつ錯雑した道程において、自ら自己の最深の自己、汝があるところのその〈生成〉*Werden* へと、苦しみつつ上昇する一連のピラミッド的な人格類型の超越的構造がある。」⁽²⁴⁾ かような、精神的愛の共同体の理念が、「愛する存在」としての人間、というシェーラーの根本思想からくることは論をまつまでもないであろう。

以上によって、われわれはシェーラーの「典型」論の内容を三点にわたって押えたわけであるが、次にはこのように概括されたシェーラーの立場に対し提起されるであろういくつかの問題を取り扱うことにする。

二

シェーラーの思想に対する批判的議論は、外在的立場、内在的立場からそれぞれ種々提起されうるであろう。ここでは、しかし、典型論という主題に密接にかかわっているであろうと考えられる以下の諸問題に触れることにする。

問題点は三点であるが、その一部はすでに前節で若干かわったものである。

第一の問題提起は、シェーラーが論じたような典型の道德生活における重要な意義を、すなわち、指導者と明確に区別される典型がわれわれの心情の作用空間を規定しているのであり、典型にまねぶことによって、われわれは何をなすべきであるかをおのずと了解するのである、という見解そのものを否定する立場からのものである。この立場にあつては、われわれの道德生活の導きの星は典型ではない。

たとえば、カントは、『道德形而上学の基礎づけ』や、『純粹理性批判』（B版五九八ページ）で、その主張を表明している。実例はどこか不完全なものであり、理想の中にある完全性をゆがめるものである。従つて理性のうちにある真の原型をさておいて実例に従うことは正当化されえない、とされる。かれにとって人間を導くものは、規範的な道德法則である。かれは、言うならば普遍性の立場からの典型否定論を提出していると言えよう。

ヤスパースも『哲学的信仰』その他の文献で否定的見解を述べている。ヤスパースの論拠は、一部はカントと同じく実例の不完全性ということにあるが、真意とするところは、実存の個性性ということである。即ち、人間は未確定にして常に途上にある存在であり、かような代替不可能な唯一無二の個別者たる可能的実存にとって、範とすべき典型はありうるはずがないとするものである。もつとも、かれヤスパースにあつては、実存と言えども全くの閉塞状況のうちにあるのではなく、愛の交りと、理性の公開性によつて他者と紐帯している。ここにキェルケゴール的な単独者との相違がある。

これらに対し、シェーラーはいかに答えるであらうか。前節でみたように、カントに対しては、かれ自らが解答している。典型そのものが完全であるわけではない、ということも一つの解答たりうるが、その人格觀の相違が根本的

な解答をなしている。人格は、理律 *logonomie* によっては基礎づけられない。規範や道德法則に従う自律ではなく、愛にもとづく洞察的な服従にこそ人格の本質的自由がある。冷たい法則の表象ではなくて、愛の感化力こそが人間の徳育にとって重要だとシェーラーはみるのである。

他方、シェーラーその人に不信感を抱き、唯一無二の実存的真理を固守しようとするヤスパースに対してはどうか。この両者は、見方によっては、同一グループに入る類似の思想家である。⁽²⁶⁾しかし、典型をめぐる見解のくいちがいには大なるものがある。ヤスパースにとって、包越者の諸々の段階（現存在、意識一般、精神）においては相対的意味での典型はありえようが——かれ自身が明言するわけではないが——、そもそもこれらの段階は独自の自存的領域をなしているわけではなく、実存が覚知されることによってはじめてそれに支えられてこそ意義をもっているのである。そして、決定的な実存の段階においては、範とすべき他者はもはや存在しない。確かに実存は愛の交りにおもむくが、それは対等の同士愛の如きものであり、闘いの様相を帯びている。なぜなら、交りは、主体性の放棄に陥らないために、常に孤独と背中合わせになされるからである。実存はくるみのように固い芯をもっているのである。では実存の導きの星は全く存在しないのか。「深められた実存的自由の中で、超越者の贈りを意識する」⁽²⁷⁾とヤスパースがしばしば語るように、超越者がそれである。超越者は、しかし、理念であって典型ではない。かくして、実存のレヴェルでは典型は存在しない。シェーラーもまた、神は典型とはなりえないとみる。「有限人格が無限人格そのものを典型とすることは、まことに背理である」⁽²⁸⁾からである。しかし、その代わり、聖者を介して間接的には神を導きとしうるのである。もし、唯一無二性ということを実存の本質的特徴だとするならば、聖者は理想の実存的現実ではない。聖者は、自他の区別を超越しているからである。個性性が問題となるのは、天才以下の典型である。しかも、この聖者が、他の諸典型の元締めの役割を担っている。「聖者は、あらゆる他の人間的偉大さの形式を包括する。

天才、英雄、身体的福祉と健康という意味での技術者をも。あらゆるそれ以下の支配的な典型タイプは、聖者の典型タイプによって近づかれうる⁽²⁹⁾。神は聖者を介し、また、諸価値は聖者に代表される諸典型を介し、人間にとって近づきうるものとなる。これによって全肯定が成立する。

シェーラーとヤスパースを根本的に分かつものは、神（理念）と人間人格（実存）との仲保者の有無である。シェーラーは、諸価値の全領域に仲保者が介在する、という思想に立つ。この仲保者の導きによって、われわれは聖化されるのである。シェーラーは、この思想を後期に至って弱め、神そのもののうちなる精神（*Geist*）と衝動との対立を解消する任務を人間が受けもつと見なすに至る。つまり神の完全性の低下、仲保者の意義の減退、人間の地位の相対的向上、という側面を打ち出すのである。しかし、カトリック的有神論に立つ中期においては、汎神論的萌芽を秘めた、複数の仲保者が存在するとみる思想を抱いているのである。

第二の問題として、シェーラーは、諸々の分野での典型は取り扱ったが、肝腎の道徳的典型を登場させないのはおかしいではないか、とする疑義が考えられる。至極もつともな議論である。しかし、もしもそれが、「シェーラーの立場では善悪が基礎づけられていないではないか」、言いかえれば、「聖者以下の諸典型のほかにも善人の典型がありうるのではないか」という前提に立つての疑義であるとするなら、その場合にはシェーラーは解答を準備していると言わねばならない。もつともシェーラー自身にも誤解を生む表現が全くないわけではない。たとえば、「倫理的価値への愛に駆られる心情の天才」とか、「具体的な場合における直接的な価値認識をもつ賢者」とかの言い方がそれである。これではあたかも、賢者が独立した道德家の典型タイプの如き感を与えかねない。しかし、これらの表現は、改稿されるべき未整理の補遺の中にみられるものであり、シェーラーの真意は、道徳的典型の挙示とは別のところに

ある。前節でみたようなシェーラーの本来の趣旨からすれば、聖者以下の五つの典型は、それ自身が基本的にはすべて道徳的典型であり、理想的な善人と言えるのである。このことは、主著『倫理学』で論じられた善悪の規定から帰結する大前提であらう。

善悪という倫理的な価値は、それ自身の自立的な価値領域を形成せず、一般的諸価値を実現しようとする意欲に付着して現出する価値である。⁽³⁰⁾ しかも、意欲は人格自体を離れたものではなく、人格はまた、愛憎によって動く存在である。だとするなら、シェーラーにとって、何かを愛する人、人格を愛する人、より多く愛する人、がほかならぬ善人であるという命題が成立することになるであらう。というのも、「愛は、善きものの最も根源的な担い手である」からである。しかも、愛の対象であるその「何か」はいろいろなものでありえても、「善でだけは断じてない」⁽³¹⁾のである。これによって道徳的パリスイ主義は退けられることになる。

この立場からすれば、諸々の価値レヴェルにおいて積極的価値、より高い価値の実現に奉仕する人格が、同時に道徳的価値の保有者でもあることは当然であらう、極論すれば、精神的天才や英雄は言うに及ばず、発明家やグルメも価値開示者として、それなりに道徳的導きの星となりうることになる。快樂主義者もまた「善い」のである。このように道徳生活が人生の各般にわたって多彩に展開されうるとするのがシェーラーの一つの原則的立場であったと言える。

しかしながら、他面では、諸々の典型が結局は聖者に集中するところから窺えるように、聖者への愛こそが最高の道徳的価値の担い手である、ということもまたシェーラーの譲れない立場であることは事実である。シェーラー倫理学は結局は宗教による倫理の基礎づけということに帰着するわけである。そうであるならば、それに対しては、宗教体験によらない独自の倫理的領域を設定すべきである、という外在的批判は成り立ちうるであらう。この場合には、

一つの実行すべき課題であつて、もはや内在的批判ではない。これに対しては、シェーラーは恐らく、そんなものはいりえないと心中で思いつつも、沈黙を守るであらう。なぜなら、「絶対的な秘奥人格に現われる（神の）自己伝達」は、絶対的に沈黙すべき義務であり、それを口外することは輕蔑すべき恥しらずである⁽³²⁾」とする慎しみもまた、かれの道徳的基本態度だからである。

最後に、シェーラーの道徳的人格の序列観そのものをどう評価し、どう受容すべきか、というわれわれ自身の立場にかかわる問題を取り上げよう。このことは、ある意味では先述の課題をわれわれなりに実行に移すということにながっている。シェーラーに即する中で行おうとする点で、まだ全く不十分なものではあるが。

再三みたように、シェーラー自身は、他の四つの典型が、聖者という第一の典型に凝縮し、それによってこそ基礎づけられ、生かされるとみている。このことはこれまで触れた理由によって明らかであるが、さらには、かれの、いわゆる人格の層的構造観からも帰結することである。人格は、感覚的存在—生命的存在—心的存在—精神的存在、という四つの同心円的な層構造をなしているものであり、後の存在になるほど、身体的・周辺の・派生的・散漫的・部分的特徴が消え失せ、精神的・中心的・根源的・一貫的・全体的度合いが増大してくる。そして、人格内においてこの超越運動が行われれば行われる程、人格の道徳性が増し加わってくるのであり、その人格は益々本質的に自由になってくる⁽³³⁾。しかるに、精神的存在への超越は、本来的には、愛の人格ピラミッドに参列することによってのほかに具現しえない。なるほど、感覚的存在、生命的存在、心的存在の各層においても、諸々の価値生活が可能であり、それぞれの典型への愛が成立しうるとは言え、表層的・客体的関係たる制限をまぬがれたいからである。人格の自体存在そのものによって結合される聖者への追隨こそが最深、最奥の精神的存在への超越をはじめて可能とするのである。

しかしながら、不幸にして、神的啓示、聖者との交り、という宗教的体験を欠く者にとっては、このことは必ずしも自明的でない。これを不幸と観じ、いつでもそれへと開いた心を保持している限りは、いづれは自証される機会があろう。しかし、頑なに心を閉ざす場合にあっては、一面的に宗教的人間を重んじ、他の類型を軽視する人間差別ではないか、という見方もまた出てこよう。確かに、序列づけというシェーラーの考え方そのものが、そうした見方への誘因となり易いのであるが。

こうした見方に対しては、われわれは、典型の序列は人間差別を意味せず、自らの状況に即した価値生活という観点からシェーラーの典型論は十分われわれにとって生かし得るのではないか、と考える。たとえば、幾分シェーラー自身から離れることがあったとしてもである。

身体的―精神的存在としてのわれわれは、事実に状況に応じて多岐にわたる諸々の価値領域に関与しつつ生きている。例えば、今日は日曜大工、明日は職務に、明後日は芸術鑑賞にと断え間なく何かに没頭している。そうしてわれわれ一人一人は、有限的な価値意識しかもち合わせていないことを謙虚に自認せざるをえない。われわれには全く理解力や感受力もち合わせない、また仮にもっていても狭く、限られている、多くの分野がある。そうした場合に、それぞれの分野における典型がわれわれに対し、諸々の価値を呈示し、導きとなるであろう。このとき、たとえば発明家は芸術家に劣るわけではないであろう。仕事をする限りでの自己にとって技術者が、諸々の文化領域にたずさわる限りでの自己にとって幾多の天才が典型となるのであるから、そもそも典型相互の間に比較すべき共通の尺度がないからである。特定の状況下にある私(S—I)が自変数であって、そうした(S—I)にとって、典型Vが従変数となるのである。「状況―私」(S—I)が変化するれば、典型Vもまた変る。このことは、「状況―他者」(S—A)にとっても同様である。

以上のような考え方にとって重要なことは、真にその状況下の私に、その典型が典型として対応するものであるかということ、つまり、(S—I)とVとの緊密性の度合い如何である。経済的貧窮、飢餓的狀況下にある者にとって、聖人君子の道は良き教示とはならないであろうからである。しかしながら、状況の窮迫に促がされ、誠心誠意狀況に聴こうとするとき、おのずと道は開けるであろう。

以上のように、宗教色を脱色してシェーラーの典型論を転釈することは、確かにシェーラーその人から離反する面を含むものであることは免れえないが、決定的に曲解し、敵対するものであるとは、われわれは考えない。なぜなら宗教倫理を強調する一方で、「時の要求」に従うことを力説するのもシェーラーであったし、かつまた、「生命相対的価値(有用価値、快適価値)は、神の理念のうちにいかなる場所も占めない」⁽³⁴⁾と言っていたかれが、永らく手元に温めていた典型論の草稿では、結局はこれらの価値に対応する典型を序列に加えていることでもあるからである。後期思想における「神のうちでの衝動」が、これと対応していることは疑いなくであろう。

注

注 シェーラーからの引用箇所ページ付けは、すべて Max Scheler, *Gesammelte Werke* (Band 1~13) によって行う。論文題目は、以下のように略記する。

Formalismus.....Formalismus in der Ethik und die materiale Werthethik.

Vorbilder.....Vorbilder und Führer.

Sympathie.....Wesen und Formen der Sympathie.

Absolutspäre.....Absolutspäre und Realsetzung der Gottesidee.

Ewigen.....Vom Ewigen im Menschen.

(1) Vorbilder und Führer. Ges. W., Bd. 10 (Nachlaßband) S. 255—344.

(2) Formalismus. VI. B. 4. ad 6. 及び同二版(一九二一年)序文、ちやうに「Ewigen, Vorrede. 尚、書名は「価値人格類型と人間的職業の社会学」を予定していた。

- (3) 編者マリブ・シェーラーによれば、草稿は、一九一〇―二一年の間に執筆された。
- (4) Vorbilder. Ges. W. Bd. 10, S. 257―263.
- (5) ibd. S. 263.
- (6) Scheler, Liebe und Erkenntnis. 拙稿「認識と価値評価」(弘大人文学部紀要「文経論叢」第12巻5号、昭和五二年、収載)は、これを取り扱った。
- (7) Scheler, ordo amoris. 拙稿「マックス・シェーラーの近代社会論」(弘大紀要「文経論叢」17―3、五七年)は、これに触れよう。
- (8) Formalismus. Ges. W. Bd. 2, S. 564.
- (9) ibd. S. 570.
- (10) ibd. S. 570.
- (11) 前掲拙稿「マックス・シェーラーの近代社会論」参照。
- (12) Vorbilder. Ges. W. Bd. 10, S. 268.
- (13) ibd. S. 267.
- (14) ibd. S. 269.
- (15) Formalismus. Ges. W. Bd. 2, S. 572.
- (16) ibd. II. B. 5.
- (17) Vorbilder. S. 270.
- (18) ibd. S. 273.
- (19) Formalismus. II. B. 5.
- (20) Sympathie. Ges. W. Bd. 7, B. III.
- (21) Formalismus. S. 563.
- (22) Vorbilder. S. 268.
- (23) Absolutsphäre. Ges. W. Bd. 10, S. 187 ff.
- (24) Vorbilder. S. 270.
- (25) ハンス・ガーナー(重田説)「ヤスバース」(理想社)、三八ページ。
- (26) たむぎや Walter Brüning, philosophische Anthropologie. (1960)での取り扱い。こゝでは両者が人間を外的秩序の下に

従属させようとする伝統哲学の立場への反対者である、として一括される。

- (27) Jaspers, der philosophische Glaube, 1948, S. 53. この他に類似表現は多数見られる。
- (28) Formalismus, S. 572.
- (29) Vorbilder, S. 287.
- (30) 拙稿「マックス・シェーラーの道徳的価値論」(弘大紀要「文経論叢」15—1、昭五十五年)は、これを取り扱った。
- (31) Sympathie, B. II.
- (32) Absolutspähre, S. 231.
- (33) 拙稿「マックス・シェーラーの自由論」(弘大紀要「文経論叢」19—3号、昭五十九年)は、このことに触れている。
- (34) Formalismus, S. 572.